

## 途上国の経験を共有したい

3月14日、春の訪れを今か今かと待ち望む北海道札幌市。世間では、ホワイトデー。この日、街中にどことなく温かな雰囲気漂う中で、JICA札幌は65人の高校生の熱い思いに包まれていた。

「ベトナムの病院に行く」と、枯葉剤の影響で奇形児になった赤ちゃんが、ホルマリン漬けにされていたんです」

瓶詰めされた赤ん坊の写真が映し出された瞬間、部屋の空気がぴんと張り詰める。

「ショックでしばらく何も考えられませんでした」

そう前に立って発表するのは、昨年秋、ベトナムとカンボジアを訪問した北海道千歳北陽高等学校の生徒たち。「自分の生活がどれだけ幸せなのかを知りました」。現地で撮影した写真を織り交ぜながら、初めての開発途上で目にした現実を訴える。

「うっかり水道水を飲んで、おなかをこわしてしまっ」

北海道滝川高等学校の栗林拓弥くんの、途上国ならではの経験に会場がなごむ。地域ぐるみの国際協力タデイツアーについて発表した。会場の、未来の国際協力の担い手たちは、まだ途上国に行ったことのない生徒がほとんど。初めて聞く過酷な現実、さまざまな質問を投げかけていた。

## オリジナルのスタデイツアー企画しよう

スタデイツアーを経験した高校生の話を聞き、大いに刺激を受けた参加者たち。私たちにできることはないだろうか。その最初のアクションとして、自分たちでスタデイツアーを企画することになった。行き先も何をすることも自由。ただ一つ、「国際協力につながる5日間の旅」がテーマだ。

まずは、グループごとに、今、気になっている世界の問題をピックアップ。大地震があったハイチはその後もどうなっているだろうか。「中国の環境問題も気になる」「カンボジアのことももっと知りたい」「フィリピンのごみ山は?」。世界地図を片手に、想像はどんどんふくらんでいく。

とはいえ、なかなかプランが決まらずに頭を悩ませる姿も。そんな彼



同世代の言葉で伝えられる途上国の現実、参加者の心により深く響いたようだ

のこと。「カンボジアには、地雷の被害に苦しんでいる人がまだたくさんいる。ずっと支援を続けていくことが大切だと感じました」。

最近、日本国内でも途上国へのスタデイツアーを実施する高校が増えてきた。その貴重な体験を、高校生同士で共有し合い、学びを深めてもらいたい。そんな願いを込めてJICA札幌が企画したのが、この「高校生国際協力冬の集い」だ。

真剣なまなざしで発表に耳を傾けるのは、北海道各地から集まった高校生たち。

「やっぱり現地に行くって違うんだなあ」

そんなつぶやきが、あちこちから聞こえてきた。

らに、途上国経験豊富なJICA職員たちがアドバイスをする。ハイチへのツアーを練るグループは、JICA国際緊急援助隊として派遣された外川徹・JICA札幌所長から現地の惨状を聞いていた。

皆で知恵を絞って完成したツアーは、オリジナルティーにあふれたものばかり。「アンコールワットで30（ゴミゼロ）運動」「ハイチで地震復興ボランティア」「インドでストリートチルドレン取材」「モリで砂漠化の現状を知る」。帰国してからも、「募金活動や支援物資の回収」「自分たちの経験を伝えるイベントの企画」など、さまざまな取り組みが提案された。

今回の集いの発案者の一人、石狩市立浜益小学校の新谷浩一先生は教育現場の実務者として、「同世代で経験を共有し思いを語り合うことで、これからの自分のあり方を考



新谷先生のアドバイスを受けながら、JICA札幌の図書館で資料探し

## 共に伝え合い、共に動き出そう

学校の枠を超えて、地域の高校生が皆で国際協力について考える。「途上国のことを知りたい」「世界のために何かしたい」という思いを胸に北海道の高校生たちが集まった。

えるヒントになれば」と期待する。「受け身ではなく、自分から先生を動かしていくような元気を養ってほしい」。

「見て、知って、その先どうするかが大切だと思うんです」

帰りがけに、北海道札幌西高等学校の浅利慧くんは力強く話してくれた。そう、彼らはこの瞬間から、すでに新たな一歩を踏み出していたのだ。

今日ここで一つになった北海道の高校生たちの思い。そこには底知れぬ可能性が秘められているかもしれない。そんなことを強く感じた一日だった。



滝川高校は今年1月にベトナムとカンボジアを訪問。写真をふんだんに使いながら、自分の目で見たこと、肌で感じたことを発表した



グループに分かれて、オリジナルのスタデイツアーを企画。皆で知恵を絞ってアイデア出しをする



ベトナムの民族衣装アオザイを着て、スタデイツアーの報告をする千歳北陽高校の生徒たち

グループごとに企画したプランを発表。人気投票が行われた

